

中古私家集の研究

伊勢
經信の集
俊頼

関根慶子 著

中古私家集の研究

伊勢
経信の集
俊頼

風
間
書
房



昭和 42 年 3 月 31 日 初版発行
昭和 56 年 9 月 30 日 再版発行

中古私家集の研究

伊勢
経信の集
俊頼

定価 八、六〇〇円

著者 関根慶子

発行者 風間 務

印刷者 中内康児

発 行 所

株式会社
風間書房

東京都千代田区神田神保町一の三四
振替 東京一八五三番
電話 (二九一)五七二九番

(有朋製本)

ISBN4-7599-0275-9

凡 例

一、本書は、出来るだけ広く中古の私家集を展望した中から、伊勢・経信・俊頼の集を位置づけ、又この三つの集の研究を通して中古の私家集を顧み、中古家集の特質を探ることにもつとめた。第一部と第二部以下との相関関係については、第一部の「はしがき」に一言した通りである。

一、本書は、昭和三十六年二月初旬に提出した学位論文に新たに年譜を添えたものであるが、論文当時から既にかなりの年月を経過したので、出来るだけ、その後の学界の業績にも徴し、昭和四十一年春ごろまでの時点に於いて、つとめて補正・加筆・整理等を施した。

一、本書は、先年刊行した小著「散木奇歌集の研究と校本」（昭和27年刊）・「経信集」（昭和26年刊、古典文庫所収）・「校註伊勢集」（昭和27年刊、村上・小松氏と共著）をふまえ、一方にはその粗漏を補正した点もあるので、必要に応じて参照していただければ幸いである。

又、経信集については、後年「平安鎌倉私家集」（昭和39年、日本古典文学大系所収）の中の「大納言経信集」で、歌順番号などの訂正したものを掲げたので、併せておことわりしておく。

一、本書の各箇所における形式的処理については、それぞれ付記した積りであるが全体に通じることとして、次の措置を挙げておく。

○引用歌文には、特例を除き、濁点・句読点を施し、適当に文字を改めたが、歌の詞書にあつては、その末尾のみ「。」や「、」を付さなかった。

○校異を示す場合、特定の本の名を挙げる必要のない時は「他本」・「諸本」・「数本」・「イ本」又は無記号とした。

一、本書と既発表・未発表の關係は巻末に掲げる。

一、本書に於ける敬称は、多く「氏」に統一させて頂いたが、恩師を「先生」と記し、年来の慣習で「博士」とした場合もある。なお故人は該当の場合すべて「博士」とした。

一、先学・同学の学恩を謝し、御説に対し、非礼の言辞があれば、御海容を願う次第である。

一、本書が成るについては、宮内庁書陵部・内閣文庫・国会図書館・陽明文庫・静嘉堂文庫・神宮文庫・天理大学図書館・京都大学図書館・同研究室・国学院大学図書館・同研究室・龍門文庫・竹柏園文庫・刈谷図書館・石川県立図書館・三手文庫・桃園文庫・初雁文庫・蓬左文庫・無窮会神習文庫に於いて、貴重資料の閲覧や写真撮影などに関し、色々と御親切にあずかった。銘記して厚く御礼申しあげる。

一、本書に図版として写真の掲載を御許可下さった宮内庁書陵部・内閣文庫・陽明文庫・天理図書館・龍門文庫、並びに川瀬一馬博士・飯島春敬氏、各位の御高配に対し深謝申しあげる。

一、本書を編むに当って、年譜の作製に関しては、「伊勢」・「俊頼」に北村杏子氏、「経信」に横山緝子氏、「田上集」の再調査などに関しては大井洋子氏、校正及び索引の作成には、杉山富子氏・松本弘子氏・北村杏子氏、以上の方々からそれぞれ有難い御協力を得た。又、木藤久代氏からは長年にわたって閲覧関係などで何かとお世話にな

った。これらの親しい方々の御温情も忘れ難く思っている。

一、本書は、文部省の昭和四十一年度科学研究費（研究成果刊行費）の交付を受けたもので担当係官の方々に種々お世話いただいたことを深く謝する。

昭和四十二年三月十日

著 者

再 版 序

本書の初版から、早くも十四年余りの歳月が流れ去った。刊行後間もなく、修正や補足を施したい所も、あれこれと出て来たが、何やかや公私の繁用に追われ、それに生来の無精とスローモーも手伝って、無為に、そのまま今日にいたってしまった。限定版であったから、もう随分前から、古書の目録に稀に見られるのみで、近年はそれにさえずっかり姿を消してしまったようである。

そこで数年前から出版元の風間書房に再版のご意向があったのに、『散木奇歌集』の集注を完了した時点でゆっくり直したり加えたりしたいからと言って、またのびのびになってしまった。ところが一方散木集の集注は、著者側の種々の事情から、未だ未だ刊行にいたりそうもないので、とうとうここで、増稿はしないまま本書の再版にふみきる

再 版 序

ことにしたのである。この再版では、今迄に気付いていた文字等の訂正と「年譜」の最少限度の補訂とをなし、本文の数箇所「再版補記」というものを加えただけである。

初版刊行後に本書に何らかの関係を持つ小論として次のものがあり、拙稿間に多少の重複があるかも知れないが、いくらかでも本書を補うところもあろうかと思われるので、敢えて付記しておく。

「歌人伊勢の活動と先駆的役割」(『お茶の水女子大学付属高校紀要 13号』所収)

「伊勢」(日本歌人講座2『中古の歌人』所収、弘文堂)

「後宮文壇の先駆としての伊勢」(『和歌文学の世界 第四集』所収、笠間書院)

「源俊頼」(和歌文学講座6『王朝の歌人』所収、桜楓社)

「源俊頼の自然詠について」(『文学における自然』所収、笠間書院)

右の拙論も併せてご高覧いただければ幸いである。

昭和五十六年七月一日

著 者

目次

凡例

第一部 中古私家集論序説……………一

はし が き……………三

第一章 「家の集」と「私家集」……………四

第一節 「家の集」とは何か……………四

第二節 「私家集」の名称の成立をめぐる……………一〇

第二章 研究史展望と中古私家集研究の二方面……………一六

第一節 研究史展望……………一六

第二節 中古私家集研究の二方面……………二〇

(1) 資料的観点……………二〇

(2) 作品的文学史的観点……………二三

第三章 中古私家集の諸相から——現段階における識別の問題……………二〇

第一節 源泉的的家集と抄出家集……………二三

第二節 別集と異本……………二三

第三節 私家集の原型と変移……………二六

目次

(1)	増補	亮
(2)	分離・混入	四
第四章	中古私家集の中に見る伊勢集・經信集・散木集の研究	四
(1)	伊勢集の場合	四
(2)	經信集の場合	四
(3)	散木奇歌集の場合	四
第二部	伊勢集の研究	五
第一章	三系統諸本の分類	五
第一節	西本願寺本系統	五
第二節	類従本系統	五
第三節	歌仙家集本系統	五
(イ)	「山風はふけど」の歌で終る本	六
(ロ)	「卯の花の」の歌で終る本	六
(ハ)	「夕されば」の歌で終る本	六
第二章	三系統をめぐる考察	七
第一節	三系統本異同の実態	七
第二節	三系統はいかにして発生したか	八
第三節	混入部の提唱と源氏物語空蟬卷尾の歌について	八

第四節	類從本・歌仙本系統に於ける意識的工作	三六
第五節	西本願寺本の性格	一〇九
第六節	醍醐寺五重塔初層天井板落書中の一首と伊勢集	一六
第三章	成立時期をめぐる考察	一〇
第一節	古今集と伊勢集	一〇
第二節	後撰集と伊勢集	一三
第三節	伊勢集とその増補部	一五
附	古今和歌六帖と伊勢集	一五
第四章	伊勢集の位相——歌物語的性格と家集的性格と——	一六
第一節	冒頭部分の歌物語的性格	一三
第二節	冒頭部分における非物語化の残存	一六
第三節	冒頭歌物語の非独立性	一七
第四節	冒頭物語の安法法師作者説について	一八
第五節	家集の部分の性格	二一
まとめ		二二
× × ×		二五
第五章	歌物語化の風潮と伊勢集	三八
第一節	歌物語化の時代	三八
第二節	歌物語的家集と伊勢集	三九

ま と め

二五

第三部 経信集の研究

二七

第一章 諸 本

二九

第一節 流布本系統

三〇

第二節 古本系統二種

三一

第二章 流布本系と古本系二本との比較考察——古本の価値——

三二

第一節 所収歌による検討

三四

第二節 詞書による検討

三五

第三節 流布本の配材

三六

第四節 古本系統甲乙二本の資料的価値

三七

第三章 古本系統二種の成立について

三八

第四章 古本二集の編成のあり方について

三九

第一節 二集の相違

四〇

第二節 四季歌の構成における二集の相違

四一

第三節 歌合歌に対する二集の相違

四二

第四節 祝の部における二集の相違

四三

第五節 恋の部における二集の相違

四四

第六節 詞書にみられる二集の特徴

四五

ま と め

終 り に

第四部 散木奇歌集の研究

第一章 諸 本

第一節 刊 本

第二節 写 本

第三節 他 書

第二章 諸本の系統

第三章 主要問題の考察

第一節 集 名

第二節 部 立 名

第三節 総 歌 数

第四節 撰者及び成立期

第四章 「散木集註」・「田上集」について

第一節 散木集註

第二節 田 上 集

第五章 俊頼の和歌

目 次

三二

三三

三七

三九

三九

三三

三六

四〇

三三

三三

三六

三九

三一

三四

三四

三九

第一節 作風	三九
第二節 俊頼の新風和歌と万葉集	三八
第三節 作風の推移	四一
第四節 用語	四六
第六章 俊頼の歌論	四四
第一節 好忠・経信の立場と俊頼の自覚	四四
第二節 俊頼・基俊の新旧歌論の対立	四九
第三節 「めづらしさ」への希求と「をかし」・「心あり」	四三
第四節 詞に対する俊頼の見解	四三
第五節 歌病観その他	四六
第七章 散木集の編撰をめぐって	四三
第一節 家集自撰の動機と散木集の場合	四三
第二節 中古諸家集編成の展望	四六
第三節 散木集編撰の特質とその意義	四六
(1) 歌員構成の苦心と散木集の重出歌	四六
(2) 集の公的性格と創意	四六
(3) 「悲歌部」と「佞躬恥運雑歌百首」との意味するもの	四七
第四節 俊頼と連歌	四三
(1) 俊頼以前の連歌と俊頼	四三
(2) 当時の連歌	四六

(3) 俊頼の新風と連歌	四九二
ま と め	四九七
「伊勢」年譜	五〇一
「経信」年譜	五〇三
「俊頼」年譜	五〇九
本書各章各節と既発表・未発表の関係	五〇七
後 記	五二一
索 引	五三三
人名索引	五三五
書名索引	五六〇

第一部

中古私家集論序説

は し が き

私家集の研究は最近とみに盛況を呈して来たようである。多くの私家集が次第にとりあげられ、書誌学的な調査、文献学的な研究はそれぞれ着々進展しつつある。しかし、私家集の研究は、未だ多くの場合、個々別々に個々の事実の究明に向っている現状にあって、書誌学的文献学的にも文学史的にも、私家集全体に共通する問題について本格的に検討したり、たてよこの流れの中に一私家集を定位する段階にはいたっていない。むしろ幾つかの家集群をたてよここに採りあげる事はあっても、それらは主として作者の生活圏・社交圏の究明や歌壇史的研究のためのものである。こうした研究は近年の新しい動向の一つで興味深いものを含んでいようが、それは私家集自体を窮極の研究目的とするわけではなからう。従って私がここに、私家集のなるべく広くを展望して試みる「中古私家集論序説」は、殆ど前例のない所に乏しい不完全な小論を展開するに過ぎないのである。ただ私は、幾つかの家集を通して、私家集についての思索を幾らかめぐらして来たので、文学史上、特異な位置を占めると思われる中古私家集をめぐって、その共通する問題を私なりに整理して、敢えて「中古私家集論序説」とした。そして本書に於ける三つの集の研究は、こうした展望と思索の中から体系づけたものであって、「中古私家集論序説」と後の三集の研究とは、この意味に於て密接な関係を持つのである。